
Queen ' s Knight

K-hell

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Queen's Knight

【Nコード】

N87610

【作者名】

K-hell

【あらすじ】

長身女子高生の雲峰紅竜クモミネセキリの元にやってきたアメリカ帰りの従弟のモウキ。モウキは女の子のように可愛い。セキリはイケメン（笑）。そんな姉弟のどたばたコメディー。

クモミネセキリ
0>雲峰紅竜、16歳、品行方正、成績優秀、陸上競技部所属（専門：走り高跳び）、全日中で3位の成績。それで私には色々な高校からスカウトがきた。

正直に嬉しかったのだが……。私には悩みがあった。人並みのでも深刻な悩みのせいで他人と上手くやっていけないのだ。それは私の外見身長176？。何故か一部の女子に人気の男役、そしてリアル男子にあれば嫉妬なのか……。筆記用具、携帯、その他エトセトラを魚介類に変えられた。

ネタなら許せる気もするのだがなあ。だが、やはり直接身長のことを言われると凹む（結構私は傷つくぞ）。

「はあどこに進学したって同じだろう……」

身長は減るものじゃなし……。あったほうが高跳びにも有利だ。ハイジャン
だが、私は「百合族」じゃないっつーの！腹違いの姉にまで飛んだ誤解をされて、今は冷戦状態だ。

姉とは今でも一つ屋根の下で暮らしている（フラグ厳禁）が、その姉御は福岡暮らしが長いせいか激しい方言使いだ。あいつは見た目ヘラヘラしているが、実はかなり頑固者だったりする。

私が譲ってもらった（冷戦勃発以前）のはこれで2度目だぞ。1度目は、私が剣道を止めて陸上を始めた時。とりあえず、クーデター級の内乱が起きた。さて、2度目・・・私のミッション系の女子高進学の特だ。

「この百合女!!」

と姉から飛び膝蹴りを食らった。でも姉の方が身長低い^{チビ}なので、アイアンクローフロムキッチン対面式で黙らせたという黒歴史があったりする（笑）。

日常は冷戦下。神に懺悔^{ざんげ}する毎日だ。リアルに女子の熱い視線を感じる。私の溜息にいたいだけだけの価値があるのだ。プライスレス。褒めても何も出ないって。

気分転換に、姉が私に飛び蹴りしたくなるほど、このM・S・（ミッションスクール、モルスーツガンムではない）へ進学を反対した理由を軽く話そう。

一言で言うところ「国」。国の体制が「貴族派」と「警察派」に分かれてから3桁の歳月になる。私の姉は「貴族派京極本家」の跡取りなんだ。そしてM・S・はどちらかと言うと、警察派寄りの学校法人だったりする。なあ・・・冷戦の意味が分かっただろう（溜息）。

1>食事が喉を通らず、憂鬱な私はいつものように昼食を抜いた。
案の定、貧血で倒れた。

つくづく思ったよ。この世に神はいないと。ただ保健室こくにいるのは倒れた私を心配してくれた級友と鬼学校保険医兼シスター様だけだった。

ああ、私は何を望んでいるかって？ 私は姉のことが嫌いじゃないんだよ。そして、私が一応でも女の子だと認めて欲しいんだ。うふへへ（照）。

「・・・雲峰さん、また自分の世界にお入りですね？ 今、私は貴女に主の教えを説いているのですよ」

シスター、「説教」とおっしゃって下さる方が私としましては楽なのです。そんなこと言えるはずなく、私は平謝りし続けた。

貧血少女は部活に参加できる訳なく、家へ帰るように神の宣告をいただいた。こんな真昼から男にも見えなくもない（自覚くらいはある）私が、地元の有名女子高の制服を着て歩いたら変態と勘違いされ兼ねない。姉の高校も昼休みなので携帯コール。

「やあ巨人妹ちゃん、こん様子だと、今日も貧血で倒れたんかいな

「？」

わざと「巨人」を接頭語にするな！！（アイアンクローを）食らわずぞ、お姉さま？

「いはな、冗談ぞうたんばってん。そーそー、今日あんたの弟の帰かえっちくるよ？」

ええと・・・私はクラクラする頭で想い返そうとした。すかさず姉の一撃。

「じゃあ、弟は迎えに行っちな 詳くわしくな、玄関に置いてあっけんメモ読んで・・・」

プツ・・・一方的に通話終了。私は京極家のタクシーで帰宅した。玄関のメモをひったくり、自分の部屋のドア鍵を閉め、ベッドの上に寝転がる。

「いたなあ...こんな奴...」

錦織ニシオリモウキ孟起、私とは対照的に女の子のような顔立ちの従弟だった。米系クォータで金髪、碧眼、真っ白な肌だったのを覚えている。よくお姉ちゃんってくつついてきた（同じ年だが、私の方が早生まれ）。

ふぁ…眠たい。私は欠伸をしてメモを投げ捨てた。姉へのせめてもの反抗だ…誰が迎えになんか行くか！私は腐っても、貧血で早退した御身分だ！！寝るに限るわ！！！！

2>クイズ番組だった。あるお笑い芸人が、高橋名人ばりにボタンを連打している。うるさいよ、うるさいって！！

日差しが目に沁みて、ことさら頭がクラクラする。家のドアベルを連打する馬鹿は何様よ。ただでさえ無駄に広くて大きい家なんだ。近所の小学生でもピンポンダッシュを憚るものを…。夢現の私はインターフォンに応じた。

「…38回も押したんだぞ…ぐすん…」

そりゃ、御苦労様。寝起きでも用事があったことくらい覚えている。

「…入れよ、モウキ…」

「言われなくても入るよ！！」

女の子のような声がかえってきたので、私は学校から帰ってきた錯

覚を起こした。とはいい訳だ。正直に、姉の命令をシカトして、モウキ（従弟）を路頭に迷わせた罪の意識がなかった。

と言ってみたが…これ…従弟か？ 金髪のツートールに、私を見上げる青色の大きい両目、そして標準サイズの女の子より小さいなと思った身長。たぶん、こいつも私と間逆だが、近しい感想を思ったはずだ。

5年ぶりの再会は、「久しぶり！」と抱き合って喜ぶベタな展開にはならなかった。

「お前誰だよ！！」

まあ…ベタに久し振りにあった姉弟が、互いに見知らぬ他人になったことを指差し確認した。

しかし、5年前とさほど変わらない少年（失礼かな？）は安心したのか、それとも私への抗議の意なのか、またぐずりだした。後者のような気がするのは、私が命令違反をした罪悪感があるからだろう。

「よしよし、悪かったな」

平謝りスタイルその3。小さい子どもの頭を撫でて、自分の非を打

ち消そうとする大人。

やはりキレたアメリカ帰り従弟は、私の手を払い除ける。

「Don't touch me!! 俺が異国の地でどれだけ孤独を味わったか、どれだけここまで来るの大変だったか、わ・か・る!？」

私は久々に誠意ある謝罪をした。

「ごめん…私、貧血で意識が朦朧^{もうろう}としてたんだ。迎えにいけなくて、本当にごめんな」

モウキは妖精^{ヒクシー}が怒っているみたいで萌えたが、面子の問題で私は、なるべく真顔に徹した。モウキの身の丈に合わないキャリアバックに視線を移す。

「もう許さないんだから!俺の帰国早々何なの!! 跪け、和製R & B!!!」

私はアッ さんじゃねえ(怒)。しかし、汝の右頬を打たれたら左頬も突き出せか。私は弟になら殴られてもいいと思っただ。やれやれ、

しゃがむか。

「ただいま、セキリ」

チュ…私の頬に欧米式あいさつ。改心の一撃だ。貧血が再発して失神するほどに。

3>私の目が覚めてから男の子のターン。私は帰国早々のモウキの前で下手をこいだことを再認識した。穴があつたら入りたいよ。とりあえず、布団に潜ろう。

ドアの向こうで家の姉とモウキが楽しげに談笑しているのが聞こえる。荷物運びくらい手伝いたかったのに。しゅんとした。

ややあつて、ノックしてもしもし。私はおずおず鍵を開けた。お盆に夕食を乗せてやってきた、満面の笑みのモウキ。家の弟^{うち}やりますなあ…好感度高いぞ。

「セキリ、ご飯食べるよね？」

かゝいいゝ？何か新婚さんいらっしやい。私は脳内妄想を必死に抑え、モウキを迎えた。

「ああ、悪いな…帰ってきたばかりで、お前だつて疲れてるのに…」

モウキの表情が曇った。あれ、私、猫の尻尾踏んだかな？

「俺は全然平気なの…セキリの方がずっと辛そうだよ!!」

俺 あたし、セキリ おにいちゃん、とでも変えてみそ。涙目の口
リシヨタっこの治癒力は伊達じゃない。私の素が出るほどに、ハア
ハア（悦）。

「そうだな、私は毎年貧血^{まいねん}だし、気をつけるよ」

ぼりぼり頭をかく。従弟すなわち三親等以下、十分フラグ立ちます
（萌笑）。モウキはあの頃のまま優しい子に成長した。私はモウキ
に「アーン」なんてしてもらい病人万歳だった。

しかし、5年の月日は少なからず溝を作る。私の隣に座っていたお
チビちゃんは唐突に話し出した。

「セキリ、あのさ…俺がここに着いたのは午後2時半。京極家のメ
イドさんが出仕したのが、訳あって4時過ぎなんだ。セキリは今起
きるまでベッドで寝てたよね。」

まあそうだな。モウキは話を続ける。

「そして、セキリの携帯にはハイネ（姉）さんへのリダイヤルが一つ増えています。ただし、ハイネさんは学校からすぐ帰られなかったとします。セキリを部屋に運んだのは誰かなんて、余計な詮索しないでね（作笑）。それで、セキリとの貸し借りゼロだから」

整理しよう。私がモウキの前で倒れたのも午後二時半だ。そして、私が持っていた携帯で姉へ連絡をとったのは、メイドではなくモウキだろう。

じゃあ、私を部屋まで運んだのは誰か？ ついでに私の身体には、廊下や階段でぶつけたらできるような外傷はなかった。モウキが1・5倍の私を無傷で運ぶのは不可能だ。考えるのを止めると言われたので推理はここまでにしたい。というか、5年も経てば他に積もる話もあるだろう。

4>「いつまで日本にいるんだ？」

「ずっといるよ。俺もセキリほど悪くないけど病気でさ。向こうの叔父さん家の部屋は、思い残すことないように片付けてきたよ」

何の病気？ 何となくお前アメリカ嫌いになっついていやしないか？

とは聞き返せなかった。例の作り笑いがATフィールドを張っていた。そうじゃなくても、自分だけの隠し事くらいあってもいいだろう。それでも、後々に聞き出せるように布石は打っておこう。

「そうか…毎日モウキが側にいてくれると私は嬉しいぞ」

「本当？うーんと、でもさ、転入した学校が違えば無理かも（汗）。家は貴族派なのに、M・S・入っちゃったから…」

カウンターパンチ。Oh my god!!主よ、私はまた失神しても宜しいでしょうか。

「おい、弟よ 聞き捨てならんな。汝、ハーレムを望むか？ 我が校は女子高ぞ!!」

モウキは「セキリ、怖いよお」と頬をぼりぼり引っ掻き、苦笑いした。モウキは意味深な呪文をまた唱えた。

「うーんと、ハーレムつても理由の一つかな。あと、俺がかわいいから…別に理由なんていいだろう!!…っていうか、セキリも州女高に通っていたの？」

私が口走る前から、州女高通いをモウキは知っていた。そして、

リアクションの薄さ加減。

思うより女は敏いのですよ？ バレバレ愉快だ、従弟よ。しかし、
敢えて言おう。私は百合女ではないと！

「あれ…男の子が潜入してもいいの？もつと突っ込まないの？って
いうか、女子高の生徒が全員そっちに走ってないことくらいサルで
もわかるよ」

「お前が拍子抜けした以上に私の腰も抜けたよ。いいんじゃないか、
現実的に困るのはモウキだけだし…」

モウキの顔が見る見るトマト色に熟れていった。おつ、手応えあり
か。

「ひどっ！！『大丈夫、私が助けるよ』とかない訳？1/4も血が
繋がっている姉弟なのに！！」

本人に自覚有りなので、溜息／安堵。

「まあ、それなりにな。それは、お前がどこまで女の子になりきれ
るかにもよる」

モウキは自信あり気に毒吐いた。

「セキリよりは女の子らしいと思うよ。だってお茶で酔うとキス魔になることもないしいゝそれに相手からキスされると失神することもないしいゝ」

お姉さまですね、愛らしい弟に要らん悪知恵を吹き込んだのは（怒）！私がどんなに百合でないと言っても、あいつのせいでご破算だ（怒怒）！！しかしモウキの手前笑ったこう。

「セキリ、あのう…脳内音声が漏れてるよ」

私は真白に燃え尽きた。ただ春の夜の夢の如し。こうして愛くるしい従弟のモウキが日本へ戻ってきたのであった。 < Q・K・EN
D >

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8761o/>

Queen ' s Knight

2010年11月23日06時11分発行